

日常と災害におけるケアのアナロジーの探究
Exploring Analogies in Concepts of Care from Everyday Life and Disasters

○土田 亮・藤井愛海・頼政良太・中野元太

○Ryo TSUCHIDA, Megumi FUJII, Ryota YORIMASA, Genta NAKANO

This study aims to illuminate the plural concepts and practices of care that emerge across various scenes and narratives in both everyday life and disaster contexts. By investigating plural concepts of care, this study examines how actors, institutions, tools, methods, relationships and narrative or scene interactions shape care in everyday and disaster contexts. Drawing on and comparing case studies from participating researchers using anthropological, group dynamics, nursing and psychological approaches, the study identified the plural forms and possibilities of care. By resituating key concepts such as risk, vulnerability, inclusion and *Tojisha* research in disaster settings, this research highlighted new possibilities for care in disaster science and clinical contexts. (108 words)

1. はじめに

本研究の目的は、日常から災害に至るまでの多様な場面で現れるケアの理念と実践を抽出し、その多元性を明らかにすることである。本議論を通じて、災害研究で用いられる脆弱性、包摂、当事者研究などの重要概念を相対化し、災害科学や臨床の領域を架橋する文脈において、ケアの新たな展望を提示することが本研究の意義である。

ケアは日常のなかで目立ちにくいものの、特定の状況で細やかな配慮を必要とする他者や対象に関心を向け、寄り添う際の倫理的な行為である。一般に、ケアの諸行為は養育、養老、介護などの社会化や贈与的現象を通じて社会や秩序、関係性を維持・再生産する重要な営為や道徳的規範として機能する。一方、担い手不足やバーンアウトなどの社会問題が顕在化することで改めて意識される領域でもある。このケアの理念と実践は介護・障がい者・児童福祉や医療、養育・養老における配慮に限定され、災害分野で考察するための有効な概念やアナロジーの理解には十分に達していない。災害研究の領域では、高齢者や障がいをもつ人などの要配慮者、ジェンダーなどのマイノリティ、避難所生活の改善、メンタル、中長期復興の支援、再び災害が起きかけた時の人や地域に対する心配と係わり合いなど、ケアが関係しうる場面は経験的には指摘されてきた。しかし、これらの場面や語りなどからいかにケアの理念や共通性が見出されるかについては検討されてこなかった。

この問題意識に立ち、「日常と災害とケア研究会」

(以下、研究会)では、各学問や分野にまたがる多元的なケアの理念と実践をアナロジーとして捉え、そこで動員されるアクターや場、道具、方法、関係性といった多様な場面や語りからいかにケアを記述・分析できるかを比較検討した。参加研究者が災害を主題に依拠・参照する学問(人類学/災害看護学/グループダイナミクス/防災心理学)、研究現場(南アジア、中南米、日本の佐賀県・高知県・宮崎県など)、さらには立場(研究者/ボランティア/看護支援/当事者など)の事例や視点をもとに、ケアの多元的な様相を議論した。そして「あれはケアっぽい」と些細な場面や語りを振り返ることで、ケアの理念と実践の多元性を探求してきた。本研究では、本研究会に参画する各人が提示した4つの概念を取り上げ、検討した。

2. 概念理解とその可能性

○ケアのロジック(人類学):医療人類学者のモルは、個人的な困難を抱える人の状況を改善し、悪化させないために、各々の生活がもつ個別性や具体性に寄り添い、持続的な調整を伴う実践を「ケアのロジック」¹⁾と呼んだ。本人がどんな状況で誰と生活し、どんな問題に直面しているか、どんな人的・技術的資源を選択・活用する必要があるのかという視点から具体性を理解し配慮することこそ善(good)だとモルは指摘している。土田は、このケアのロジックを災害復興の場面に応用することで、あらかじめ定まった解のない災害復興や災間期の状況でも、被災者と家族、ボランティア、

瓦礫やニーズシートなど人工物を含む多様なアクターが集合的に係わり合い、より善い状態を形づくろうとするケアが浮上すると考察している²⁾。

○多声的・多角的現実 (防災心理学) : 中野・矢守は、災害を主題に、研究者自身が撮影・編集したビジュアル・エスノグラフィ(VE)を共同当事者らと視聴・検討し、そのフィードバックをコメントビデオ(CV)としてまとめる手法を考案した。VEと複数のCVを通じて可視化された羅生門的現実を、時間的前提、空間的前提、関係的前提、活動への評価の視点から整理することで、一つの防災実践には多声的かつ多角的な現実が併存していることを示した³⁾。この可視化により単にある時点での多声的・多角的視点を静的に示すのではなく、今後のベターメントに取り組むうえで、共同当事者が多声的・多角的視点を踏まえることが可能になると指摘している。また、これらの対話自体が災害に伴うトラウマケアとしても機能し、共同当事者の理解を深める機会でもあったと考察している。

○ベースの支援と場 (グループダイナミクス) : ケア論について研究してきた社会学者の三井は、ケアに関わる支援を従来型専門職による支援、専門職のケア、ベースの支援の3つに分類している⁴⁾。これをもとに頼政は、災害時における被災者支援も、災害によって生じた課題を解決するだけでなく、専門的な知識や技術が必要な支援とあわせて、被災の前と後におけるベースの支援をいかに担うかを検討する必要性を指摘する⁵⁾。また、頼政は、支援団体があらかじめ詳細な活動計画を定めず、柔軟に変更しながら地域住民の想いを実現するためにベースの支援を重視し、活動の終わりを設定しないことで被災者の日常を意識し、前と後をつなぐ役割を担う重要性を示唆している⁶⁾。

○セルフケア理論 (看護学) : 看護学においてセルフケア理論を提示したオレムによれば、人間をセルフケアできる存在として位置付けている⁷⁾。平時から自らの身体や生活について理解を深め、セルフケア能力を高めておくことが、自立した個人としての自助を促すとともに、必要な知識やリテラシーの発揮にもつながる。これを踏まえ、藤井・野嶋は災害時に必要とされるセルフケアに関する知識の向上を目的に、糖尿病患者のための災害手帳を開発した⁷⁾。この手帳は備えや心構えに加えて書き込み式を採用し、身体の状態や薬、食事などを客観視するとともに対処行動を取りやすくな

るツールでもある。自己認識から専門職のフィードバック、行動促進までを一体化する手帳の存在により、平常時も非常時も自らの身体を労わりつつ、他者への理解や周囲の環境を改善する方向へと調整していく可能性が示唆されている。

3. おわりに

近年、頻発する災害や社会の揺らぎが常態化し、ケアの営みや関連する制度・関係性が形骸化、再編を余儀なくされている。こうした状況下で、新たなケアらしさはいかに構築されうるのか。本研究会では、災害と日常を往還する視点から新たなケアの問いを生み出し、理念や実践を通じて問いに応答しようとしてきた。議論のなかで浮かび上がったキーワードとして、不確実な状況下での反復的時間、目標なき目標や計画を共有する場と関係性、評価や認識の主体の曖昧さ、責任の主体の不可分性などが挙げられる。これらは今後さらに詳細に検討すべき対象だと考えられる。

4. 参考文献

- 1) アネマリー・モル. (田口陽子、浜田明範・訳). 2020『ケアのロジック：選択は患者のためになるか?』水声社.
- 2) 土田亮. 2024「ケアする災害復興に向けたモノとの関係性：石川県七尾市中島町での民間災害ボランティア支援を通じて」都市計画, 369, pp.130-131.
- 3) 中野元太, 矢守克也. 2021「チェーンド・ビジュアル・エスノグラフィの展望：防災アクションリサーチの多声的・多角的現実の表現」質的心理学研究, 20(特集号), pp.90-96.
- 4) 三井さよ. 2021『ケアと支援と「社会」の発見：個の向こうにあるもの』生活書院.
- 5) 頼政良太. 2023「ベースの支援に根差した災害時の多様な活動を生み出す＜場＞についての研究：一般社団法人おもやいの活動から」災害と共生, 7(1), pp.1-15.
- 6) ドロセア, E. オレム. (小野寺杜紀・訳)『オレム看護論：看護実践における基本概念 第4版』医学書院.
- 7) 西川愛海, 野嶋佐由美. 2016「「糖尿病患者の災害手帳～今からできる備えを～」を活用した教育的関わりのあり方」高知女子大学看護学会誌, 42(1), pp.97-107.